

ハンフリー・レプトンの庭空間 ーロマン主義期の文化表象としてー

石倉 和佳
人間環境部門

Humphry Repton's Garden Space as a Cultural Emblem of the Romantic Age

Waka ISHIKURA
School of Human Science and Environment,
University of Hyogo,
1-1-12 Shinzaike-honcho, Himeji, 670-0092 Japan
ishikura@shse.u-hyogo.ac.jp

Abstract

The aim of this paper is to examine the ways in which the leading garden designer of the romantic age, Humphry Repton, has been appreciated in the history of gardening in England, by exploring the aesthetic, cultural and psychological values of his garden practice including garden designs and publications, in respect to what the Romantic poets, such as Wordsworth and Coleridge intended to express through their poems. Special attention is paid to Horace Walpole's essay on the English garden (1770), which has been influential in establishing the history of English gardening, and focusing on eighteenth century landscaping. Walpole's essay seems to have contributed to complicating the importance of Repton's wide-ranged garden designs, while Romantic studies have paid almost no attention to the relationship between Repton's garden designs and their implications, and the romantic aesthetics, which celebrated the power of imagination. In this paper it is also shown that Repton's spatial formation of a self-contained, comfortable, and beautified enclosure, which to a degree extends the natural scenery into areas occupied by residential buildings—a tactic he calls “appropriation”—is in some way analogous to what Romantic poets tried to express in terms of imagination. In their poetic activity, imagination centres on the sphere of natural scenery, and if one would incorporate those natural images into one's own literary expression, one would have a right to claim what has been translated into human language as one's own.

1. ロマン主義期の庭園文化の状況

イギリスにおける庭園と文学の関係は、18世紀のジョセフ・アディソン(Joseph Addison, 1672-1719)やアレクサンダー・ポープ(Alexander Pope, 1688-1744)に代表される文学者たちが提示

した、新興ブルジョア階級の文化表象形成のための造園プログラムに代表されると考えられてきた¹。この理解の背景にあるのは、イギリス風景庭園を通して表現された緑と空を映した水辺の広がる田園的な眺めが、イギリスの国土の表象として積極的な

意義付けをなされたという事実がまず挙げられる。18世紀に完成した風景庭園は、イギリスが文化的成熟とともに生み出した独自の庭園様式であり、その後ヨーロッパにも強い影響を与えた。文学史から見れば、イギリスの国家的表象の形成に、文学者が提言した庭や緑なす丘の眺めが寄与したという観点から、文学の重要性を示すものとして歓迎され受け入れられたとも考えられる。

その後1790年代には、プライス(Sir Uvedale Price, 1747-1829) や ナイト (Richard Payne Knight, 1750-1826) によるピクチャレスク庭園の提言がなされるものの、それ以後の庭園意匠は徐々に多様化していく。1790年代から1820年代まではイギリス・ロマン主義文学の展開期であるが、この時期の前半には、1799年からのナポレオン戦争によって、イギリスの国土の利用は農作など実利的なものを強く志向するようになり、庭園への関心は相対的に後退したといわれている。イギリス・ロマン主義の時代、庭園と文学の関連は、それらを成立させる社会的背景からみても、18世紀とは全く様相が異なっていた。19世紀になると18世紀の庭園文化を支えた上流階級に代って、産業の変化とともに成功した企業家などが庭園を造るようになった²。庭園の規模は小規模なものも多くなり、園芸に利用できる植物の数も飛躍的に増えてきていた。それと同時に造園や園芸に関する出版物も18世紀の場合とは比較にならないほど多く出版されるようになっていた³。

この時期を代表する造園家は、ハンフリー・レプトン (Humphry Repton, 1752-1818) である。レプトンが庭園デザイナーとしての仕事を始めたのは1788年頃といわれている。その時は、風景庭園の完成者としてイギリス各地の造園を手掛けたランセロット・ブラウン (Lancelot "Capability" Brown, 1716-83) がこの世を去り、続く時代を代表する造園家がまだ登場していなかった。レプトンはブラウンの後継者として庭園デザイナーとして認知され、庭園の改良案を風景画と文章で示す方法で提示する、新しいスタイルの庭園のアドヴァイザーとして名を成したのである⁴。レプトンがそれまでの造園家と異なるのは、自分の造園理論や手法についての著作を庭園風景のスケッチ画とともに出版したことである。レプトンはジェントリ層の出身で文芸や絵画などの趣味によく通じていた。造園に際して多くの下請けの作業員やその親方達を使っ

ていたブラウンと異なり、彼の仕事は庭園の改良案を示すことであり、実際の造園作業は依頼者の判断により行われていた。レプトンが理想とした庭園の形は、彼のアドバイスに沿って忠実に改良される場合もあったが、時には彼の提案がほとんど実行されないこともあった。彼にとっては、自分の庭園に関する理想は、実際の庭を自分の手で作ることを通して達成されるものというよりも、現地を見て描いた絵と文章で示された中に表現されていたともいえる。レプトンの造園が、当時の人々に強いアピールを持った理由の一つとして、彼がデザインした庭園風景を自ら水彩画にしたものの版画が数多く出版されたことがある。エッチングによって写し取られたレプトンの庭園風景画は、消費財として流通するものでもあったのである⁵。

19世紀への変わり目に重要な仕事をなしたレプトンであるが、先にも述べたように、同時期のロマン主義作家との関係はこれまでほとんど考察されてこなかった⁶。レプトンの庭園アドヴァイザーとしての仕事には、上流の大土地所有者の風景庭園の改良も多く含まれていた。レプトンの仕事が階級社会を前提としたものであると理解されたとすれば、共和的な理念を持ち、無名で貧しい人々への共感を表現したロマン派の人々とは無縁であると考えられても不思議ではない。実際レプトンが18世紀のいわゆるお上品な社会('polite society')の趣味を維持しようとしていたことは確かである。彼は大土地所有者のエンクローチャーによる土地改良の一つに庭園の美的管理をとらえていたが、それに対してロマン派詩人たちが共感を向けたのは、土地を奪われてさまよう人々や自由と平等の理念のもとに行われる社会改良への動きであった。

それではレプトンとロマン派詩人たちは、偶然に同時期に活動したというだけで何の共通点もないのだろうか。レプトンの大きな関心の一つは、邸宅の敷地内での暮らしとそれを取り巻く芝地や木々や水辺との間に、どのような美しく合理的で心地よい空間構成が可能であるかということであった。レプトンがプライスへの手紙に書いたように、居宅を取り巻く庭の空間はその景色を「絵」として捉えられるだけでなく、そこに住む人間の活動を中心とした空間として、様々な動線とともに総合的に整美されなければならないと考えていた⁷。一方でロマン派詩人たちは自己の想念と外界の自然との調和をヴィジョンとして詩に描いた。詩の語り手は、自己

が自然の中に発見した様々な事物の様態とそれが心にもたらす効果を語るが、それらは客観的に観測されたものではなく想像力が取捨選択して自己の認識の中に取り込んだものとして表現される⁸。表現の方法は全く異なるにせよ、自己を中心に広がる周囲の空間を、自らのものとして再構成しようとする意欲は、彼らに共通する関心の方向として指摘することが出来るのではないだろうか。

このように考えると、レプトンが庭園デザイナーとして提示した居宅を取り巻く緑空間の構成が、どのような思想を表現しているか、それがどの程度同時代のイギリス・ロマン派の文学と関連して考えられるのかについてより詳細な検討が必要である。この点を踏まえて本論文では、まず、18世紀風景庭園の評価を決定づけたホレス・ウォルポール(Horace Walpole, 4th Earl of Orford, 1717-97)の庭園論、*A History of the Modern Taste in Gardening* (執筆1772, 初版1780)に注目したい。この論考は風景庭園をイギリス独自の庭園様式として積極的に定義づけた初期のものであり、その後の庭園史観に強い影響を持ったものである。本論ではこの庭園論を批判的に検証し、レプトンの庭園史上の位置づけを再考する。次に、レプトンが単なる風景庭園の継承者としてだけではなく、庭園空間が人々の心に与える意味についてさまざまに模索していたことを跡づけながら、ロマン派詩の自然描写との同時代性を掘り下げたい。

2. ホレス・ウォルポールの庭園論再考

ウォルポールは *A History of the Modern Taste in Gardening* で、チャールズ・ブリッジマン(Charles Bridgeman, d.1738) やウィリアム・ケント(William Kent, 1685-1748)といった造園家による風景庭園の意匠の確立に言及し、前世紀の整形形式庭園様式からの根本的な変革の梃となったのが、ブリッジマンが隠し堀(ha-ha)を導入したことであると述べ、次のように続ける。

At that moment appeared Kent, painter enough to taste the charms of landscape, bold and opinionative enough to dare and to dictate, and born with a genius to strike out a great system from the twilight of imperfect essays. He leaped the fence, and saw that all nature was a garden...(289)⁹

その時ケントが現れたのだ。彼は風景の魅力を味わうことのできる画家であり、思いきって指示ができる大胆さと意見を持っており、そして不完全な試みの薄明の中から偉大な庭園様式を生み出す天才を持って生まれた者なのだ。彼は堀を飛び越え、そしてすべての自然が庭であると知ったのである。

隠し堀によって視覚的な障害物が取り除かれ、庭の内側の敷地からの視線は外側の空間へと遠くまで伸び、緑や森や水辺や木々の作り出す陰影の美しい自然の風景が庭の内側に取り込まれる。イギリス風景庭園の誕生を描いたこの部分はとくに有名であるが、この後も、自然の風景を縦横無尽に取り入れるイギリス風景庭園の重要性は、イギリス庭園を語る際に繰り返し語り直されることになる¹⁰。

ここで注意したいのは、ウォルポールの庭園論は、18世紀イギリスの政治的権力の中心であったブルジョア大土地所有者層が生み出した庭園様式の正当性を主張する立場から書かれたものであり、現代の視点から見れば批判的読解が必要だという点である。ウォルポールの父、ロバート・ウォルポール(Robert Walpole, 1st Earl of Orford, 1676-1745)はホイッグ党の党首として長く首相の座にあった。息子のホレス・ウォルポール自身は、政治家や作家であるほかに、絵画などの芸術に造詣の深い趣味人として、またゴシック趣味の先導者として、18世紀の文化人の代表的人物であった。ウォルポールは、政治権力の主流に限りなく近い位置にあって、18世紀のイギリス文化を語ったのであり、彼にはいわば、大土地所有者の上流階層の文化表象を権威づける役割があったともいえる。

それでは、ウォルポールの庭園史を読み解く際にどのような批判的スタンスが必要なのだろうか。庭園史家のハント(John Dixon Hunt)はウォルポールの庭園史について、「とりわけ偏向的で、計略に富み、そして何よりも恐ろしいほど説得性がある」(“particularly tendentious, resourceful, and, above all, horribly persuasive,” Hunt, “Approaches,” 84)と述べているが、この所見はウォルポールの庭園論の性格を簡潔明快に指摘したものだろう。彼の庭園論に政治的偏向があることは以前より指摘されているが¹¹、現代においても風景庭園の重要性を示したものとして影響が大きいのである。ハントはさらに、ウォルポールの庭園史ではそれまで

の庭園様式の発展、すなわち歴史的なパースペクティブが消去され、「イギリス庭園」と呼ばれるあらゆる空間はケントとブラウンの登場とともに現れたかのように描かれていると述べている。そのように語られる風景庭園は、しかし同時に偽装された歴史性の中に置かれ、庭園の発展の中で生み出されたかのようにも描かれているというのである。

ウォルポールの論考は、古代バビロニアやローマ時代の庭園から説き起こすものだが、そこでの議論は巧みに誘導され、取捨選択の方法は多分に恣意的である。言い換えればそれは、包括的であるかに見せてそうではなく、風景庭園の絶対的優位を導き出すためにその議論を構成しているのである。たとえば、フランシス・ベーコン(Sir Francis Bacon, 1561-1624)への言及はあるが、楽園としての庭といった一般的な事項に留まり、ベーコンがその庭園論(「庭園について」, “Of Gardens”) で数えきれないほど列挙した新しい園芸品種としての花々については言及がない。また、18世紀前半の庭園史については、フランス発祥の趣味である美的に装飾されたコテージや菜園(Ferme ornée [ornamental farm])への関心等は一切言及されず、ウィリアム・チャンバース(Sir William Chambers, 1723-1796)の中国趣味と北京の中国庭園の話題のみが取り上げられている。彼が自らのイギリス庭園史からそれとなく省き、評価しない態度を取っている事項は、フランスやオランダで発展し移入された果樹と花々の庭園の意匠である。ウォルポールは、エリザベス朝時代に描かれた花壇や果樹園はプリニウス(Pliny, A. D. 23-79)の博物誌に描かれているのと同じであり、ローマ時代の人々は今では大衆でも喜ばないような花壇に感心していたといった言及をしたあとで、そのような庭園意匠は、王室付きの造園家であったロンドン(George London 1640-1714)とワイズ(Henry Wise 1653-1738)によってオランダ風に実践されたと述べている¹²。ローマ時代とエリザベス朝との時代差に加えて、エリザベス朝と名誉革命後の王室との時代差を無視した考察は、果実や花壇の庭に対する興味の焦点をぼかす効果を生み、続く風景庭園についての論考の論理性が際立つ結果となっている。

ウォルポールの庭園論は、彼の死後も出版されたが、1820年代に編集された版では、多くの注解が付せられたことによってさらに偏向の度を増すことになった。アディソンが『スペクテイター』(*The*

Spectator) 紙に書いた庭園論と、ウォルポールの庭園論との整合性が意識され、ウォルポールの語る庭園史の文脈にアディソンの庭園論が置かれることになったのもその一つといえる。『スペクテイター』No. 477の記事について、「彼 [アディソン] がこの記事以前に書いたNo414にある意見と、なんとほとんど一致するところがないことか!」(“How little does this opinion accord with those, which he[Addison] had previously given in No. 414!” *Anecdotes*, ed. Dallay, 257) と注解者は半ば揶揄している。この事例は、ウォルポールの庭園論の受容が、それ以前の庭園論の理解にまで影響した事例といえる。No.477の記事でアディソンは、ロンドン(George London 1640-1714)とワイズ(Henry Wise 1653-1738)を「我らが英雄的なる詩人たち」(“our Heroick poets,” *Spectator*, vol.4, 190) と呼び、彼らによるケンジントン宮殿の作庭を絶賛している。一方No.414の記事は、No.411から展開している「想像力の快」(pleasure of imagination)を主題としたものあり、自然の平原や森の風景などの眺望が人間にもたらす喜びは、人工的な造作物が作り出す喜びよりもはるかに大きいことが述べられている。これらの記事はしばしば風景庭園への趣味の転換を示したものとして言及されるものであるが、それではアディソンが二つの種類の記事で矛盾したことを書いているかという点が問題となる¹³。No.477の記事は、No.411からの「想像力の快」についての記事を最近読んだ読者から、という趣向で書き始められている。アディソンは「想像力の快」を論じたのとは別な語り手を登場させて、庭を違う角度から描き出しているのである。ポイントとなるのは、No.477の記事が、庭園と詩とを共に芸術としてとらえ、様々な庭の様子がどのように詩作と連想的につながるかという趣向の中で書かれていることであろう。ここで展開した庭園論は、邸宅の近隣の空間を彩る花壇や果樹園のあしらいや、花々や果実の実る光景を楽しむ心についてである。アディソンの庭園への視点は、花壇と果実のある囲われた庭、冬でも緑に囲まれた庭など、日常生活との接点が強いつまみ庭空間に向けられており、これ自体18世紀初頭の庭園観をよく示したものともいえる。とはいえウォルポールの示した風景庭園の文化的優位はその後の庭園史ディスコースでも生き延びることになった。アディソンの語る庭園論は、風景庭園の文脈で評価される傾向が生まれたということであ

る。

さて、ウォルポールの文人としての評価は、ヴィクトリア期になると確実に凋落した。産業革命を経て中産階級が勃興したイギリス社会において、ウォルポールの政治的意識や貴族的ディレッタント趣味が反映された文章は、受け入れがたいとみなされたようである。この傾向を決定づけた一つに、トマス・マコーリー(Thomas B. Macaulay, 1800-1859)の『エディンバラ評論』(*The Edinburgh Review*)における『ウォルポール書簡集』への書評がある¹⁴。マコーリーの筆は、ウォルポールの文章が持つ毒をすべて消してしまうほど辛辣であった。

The faults of Horace Walpole's head and heart are indeed sufficiently glaring. . . He was, unless we have formed a very erroneous judgment of his character, the most eccentric, the most artificial, the most fastidious, the most capricious, of men. His mind was a bundle of inconsistent whims and affectations. His features were covered by mask within mask. (Thomas Macaulay, *Edinburgh Review*, October 1833)

ウォルポールの頭と心にある欠点は、確かにいやというほど目ざわりだ。(中略) 彼は、もし我々が彼の性格についてとても間違った判断を下しているの でなければ、最も奇矯で、最も不自然で、最も選り好みし、最も気まぐれな人物だった。彼の心には、つじつまの合わないむら気と気取りが束になっていた。彼の相貌は仮面の上に仮面が覆っていたのだ。

マコーリーのウォルポール評は、19世紀中盤以降におけるウォルポールの積極的評価を妨げた、というだけではない。続く世紀のウォルポールへの関心の低下を呼んだことは確かである¹⁵。そしてその結果、彼が風景庭園を称揚したことの具体的な意図と背景にある歴史的なコンテクストは忘れられることになった。20世紀になって庭園史が再考されるようになったとき、ウォルポールの庭園論は重要な論考として考察されるようになったが、この庭園論はイギリス風景庭園で論じ終わっている上、花壇や果樹の庭園の歴史的発展の消息が消されていたのも事実であった。ブラウンの後継者として庭

園デザイナーの仕事を始めたレプトンの仕事は、18世紀に成立した庭園の伝統である風景庭園の継承という文脈で主に理解される傾向があるのも、ウォルポールが庭園論で提示した風景庭園の評価の枠組みが、その後の庭園史のディスコースに浸透したためだとも考えられる。別な視点から見れば、風景庭園の継承者という位置づけ以外、レプトンの仕事には相対的に低い評価が下される傾向があるということだろう。

3. ロマン主義期の庭園観とレプトンの造園における「専有化/適切化」の意味

18世紀の間に完成した風景庭園の様式は、その後の都市設計や住宅地開発などに応用され活かされていくが、庭園様式そのものは19世紀に入ると非常に多様化した。18世紀のように、風景庭園という一つの様式の庭を造ることが一つのステータスであった時代は去り、庭の所有者が様々に庭園空間を意味づけていく時代が来たのである。当然風景式を庭園意匠に取り入れることも引き続き行われた。しかし、前述したように産業構造の変化を伴う時代の変遷は、庭空間への視点に変化をもたらさざるを得なかったのである。

ロマン主義期の庭園観を考えるために、有益であると考えられる文献として、『四季評論』(*The Quarterly Review*)に掲載された、レプトンの *Fragments on the Theory and Practice of Landscape Gardening* (1816) への書評(1817年1月)がある¹⁶。レプトンの著作を取り上げた『四季評論』は、急進派の『エディンバラ評論』に対抗して発刊された保守派の書評誌であり、当時の出版文化をけん引した出版物の一つであった。『四季評論』に載ったレプトンの書評では、ウォルポールの庭園論の文脈が踏襲されている上に、ナポレオン戦時下の時勢も反映してか、フランス的な庭園趣味に対しては辛辣な表現で否定的な評価が下されている¹⁷。また、ナポレオン戦争期に醸成された愛国的な心情の表現も見受けられ、また中国庭園への言及もある。同時に、ジョージ・マカートニー (George Macartney) を全権大使とする中国への外交使節団(1792-93) が訪れたことによりイギリスの人々の間で有名になった北京郊外にある皇室庭園も紹介されている。19世紀初頭には、すでに都市部での鉢植えなどを使った園芸が広く行われるようになっていたが、この書評は全般的に見て、ウォルポー

ル流の18世紀以来の上流大土地所有者に代表される政治的関心が反映されている一方で、園芸に関する論述はほとんど展開されていない。都市部の中産階級の趣味としての花を楽しむ小規模な庭造りがこの書評から排除されていることは、レプトンの庭園デザインへの評価も一面的であることを示唆している。

この書評は、レプトンの *Fragments* に描かれた庭園や改良案の詳細を論じることなくウォールポール流の庭園史を論じている点において、18世紀に成立した風景庭園を文化的ステイタスとして賞賛することの時代的限界を垣間見せているものといえてよい。レプトンの *Fragments* には、この書評にあるような庭園観のみが示されているのではないからである。ただ、この書評の著者は、レプトンを風景庭園の継承者としてあくまでも位置づけようとしているのである。

本章では以下、レプトンの造園理論において重要となる「専有化／適切化」(“appropriation”) ¹⁸ の概念に注目しその詳細を検討していきたい。レプトンはこの語を彼の最初の庭園デザインを論じた書である *Sketches and Hints on Landscape Gardening* (1795) から用いているが、生前の最後の出版物となった *Fragments* では、最も総合的に論じている。レプトンは「専有化／適切化」(“appropriation”) という語を、以前は窓から見える見晴らしを表現するために用いたと述べ、その場所が私有物であるということが示されている状態であると説明している。そして次のように述べる。

A view into a square, or into the parks, may be cheerful and beautiful, but it wants appropriation; it wants that charm which only belongs to ownership, the *exclusive right* of enjoyment, with the power of refusing that others should share our pleasure: and, however painful the reflection, this propensity is part of human nature. (233)

街路に囲まれた一角や邸宅の向こうに広がる庭地の眺めは、心地よく美しいだろうが、専有化を欠いているのである。その眺めは、他者が同じ喜びを共有することを拒む力を伴って、所有していることと楽しみを享受する独占的な権利に存する魅力を欠いているのだ。このような省察がいかにつらいものでも、この心理傾向は人

間の本質の一部なのである。(下線筆者)

「専有化／適切化」がもたらす所有の感覚によって、目の前に広がる眺めを自分のものとして独占的に楽しむことについてレプトンは言及しているが、これを大土地所有者の独善的な楽しみ、と考えてしまうのは、彼の真意を汲み取っていることにはならない。彼は人間の本性について考察し、一般的に人は自分のものと思える美しい眺めに愛着を抱き、その光景を心地よいと感じるということを述べているのであり、そのような思いを自分の所有地の中に所有物として囲い込んでしまうことが庭園造りにはしばしば見られることを指摘しているのである。そして、庭園の主が視界に他人の姿や所有物が入ることを極力避ける傾向があることを、次のように具体的に説明する。

I have too frequently witnessed a greater satisfaction in turning a public road, in stopping a foot-path, or in hiding a view by a pale and a screen, than in the most beautiful improvements to the scenery; and sometimes have contended in vain against the firs and poplars, which, on the verge of a forest, presented more agreeable objects to the proprietor than the scenery of the forest itself; one acknowledged that he would rather look at a young sapling of his own, than the most venerable oaks belonging to the Crown. (233)

私は非常にしばしば、風景が最も美しくなるように改良した場合よりも、一般の人々が歩く公道を横にそらせたり、歩行者用の小道を行きどまりにしたり、柵や遮蔽物で見晴らしをさえぎったりする際に、より大きな満足がもたらされることを見てきたのだ。そして時には、森の風景そのものよりも、所有者にとっては好ましいものと映る森の端に生えているもみの木やポプラの木々について、むなしく議論したりしたのだ。ある人は、最も尊ぶべき王家のオークの木を見るより、彼が植えた若木の苗を見ていたいと考えたくらいである。

レプトンの顧客の多くは、自分が作り上げた庭園の風景を「自分だけの」ものとして楽しもうとしていた。風景として美しい森の眺めやオークの木々が自

分の庭園の周りにあっても、自分が植え、育つのを
見守った木々に愛着を覚えていた。これは人間の心理から見る心地よい空間の成立についての一つの
洞察といえる。

レプトンの考察は、しかしこれだけでは終わらない。彼の顧客のほとんどが、自己の庭園空間を専有化し自分たちだけの喜びに浸ることを望むという
事実言及のち、例外として二人の貴族¹⁹の話をもち出す。彼らは例外的に、一般の人々が行き来する様子を楽しみ、自らの所領で近隣の人々がスポーツを行うことを楽しんだ、というのである。一人は非常に花壇を好み、その花壇に置かれた椅子から人々が行きかう様子を見て楽しんだという。もう一人は自分の所領で近隣の住民たちがクリケットをすることを奨励することさえしていたという。これらの例外的事例は、イギリスの庭園を人々に開放し、その眺めや庭園空間を自分たちの家のように、すなわち自分たちに所属するものと感じられるものとして楽しむ、将来の緑空間の在り方を示す部分の前段となっている。

レプトンの時代は産業革命の進展やそれに伴う情報、通信網の飛躍的な改良と人口の大幅な増加を見た。彼が庭園デザイナーとして仕事を始めた1780年代から、1810年までの間には、急激な居住空間を取り巻く変化が起こっていた。彼はそれらの変化をおそらく念頭において、次のように続ける。

For the honour of the country, let the parks and pleasure-grounds of England be ever open, to cheer the hearts and delight the eyes, of all who have taste to enjoy the beauties of nature. It was, formerly, one of the pleasures of life to make tours of picturesque inquiry; and to visit the improvements in different parts of the kingdom; this is now changed to the residence at the watering-place, where the dissipation of a town life is cultivated in a continual round of idle heartless society; without that home which formerly endeared the life of a family in the country. (234-235)

この国の名誉のために、イギリスにある庭園の草地や庭地を人々に解放しよう。自然の美を楽しむことが出来る嗜好を持ったすべての人々の、心を慰めたり目を楽しませたりするために。以前には、ピクチャレスクな場所を訪ねる旅行をするとい

う人生の一つの楽しみがあった。そしてこの国の美しく改良された様々な場所を訪れることも。そういった場所は、今では治水された住宅地に変えられ、街の暮らしでの消耗は、無為で無情な交際の絶え間ない連続の中で深まっている。かつてはこの国の家族の暮らしを愛しいと思わせたあの故郷がそこにはないのだ。

レプトンはイギリスの美しい庭は人々に解放されて楽しまれるべきだ、と述べている。この時代、だれでも利用できる公園 (public park) という概念は一般的ではなかった。庭園は王室や個人のもので、ロンドンで最初に公園として1830年代に一般開放されたリージェンツ・パーク (Regent's Park) も、最初の整備計画ではジョージ四世の離宮として設計された。ウィリアム・ギルピンの一連の国内旅行記の出版により、ピクチャレスク・ツアーの流行が起こったのは1780年代からである。レプトンが回想しているのは、18世紀末にはイギリスに存在し人々に共有されていた風景への感受性であり、彼はそれがナポレオン戦争期を挟んで大きく変化したと考えている。そして、都市生活が一般化するにつれて、人々は愛しいと思う場所に住むことなく、ただ消耗を繰り返す日々を過ごしている、とレプトンは述べる。であるから、かつてイギリスの人々がその田園風景や美しく整えられた庭の眺めを楽しんだように、心ある人には美しい風景が解放されるべきだと述べているのである。これは必ずしも、パブリック・スペースへの具体的な提言ではない。レプトンの視点で重要なのは、その場所への愛着という心理的な要素である。

And, after all, the most romantic spot, the most picturesque situations, and the most delightful assemblage of nature's choicest materials, will not long engage our interest, without some appropriation; something we can all our own; and if not our own property, at least, it may be endeared to us by calling it *our own home*. (235)

そして、結局、最も幻想的な場所、最もピクチャレスクな状況、自然から選び抜いたものを最も楽しく集めた光景は、何らかの専有化なくしては私たちの興味をつなぎとめることはないだろう。何か私たちが自分のものと呼べるもの、そして私

たち自身の所有物ではなくても、少なくともそれは「私たち自身の故郷」と呼ぶことで愛しく思われるものであるだろう。(下線筆者)

最後にレプトンが述べていることは注目されている。というのは、庭園デザイナーとしての経歴の最後の段階で、レプトンが庭園の喜びを必ずしもその土地や屋敷の所有が前提であるとは考えておらず、その庭—ひいては土地の眺めを、故郷、つまり自分の帰属する場所として捉えることをより重要な要素として捉えていることを示しているからである。先にも触れたように、彼がデザインした庭の所有者たちは自分の好みに従って庭園を造り、中にはレプトンの提案をほとんど受け入れない場合もあった。レプトンはアドバイザーであるにすぎなかったが、彼が提示したのは、庭園デザインの依頼者にも、そしてその庭を知らない多くの人にも、理解できる美しさと心地よさをもった緑の空間であった。このことは、レッド・ブック(Red Book)と呼ばれた依頼者への提案書に水彩画として描き込まれた庭の景色の多くが、その後銅板絵付にされて出版され多くの人々に鑑賞されていたことと関連しているだろう。彼のデザインは閉じられた庭空間から外に出て、出版文化を通して、多くの人々の知るところとなっていたからである²⁰。

レプトンのいう「専有化／適切化」(appropriation)は、実際の造園の際に、庭の所有者が好む形の庭を自らの専有領域として作りあげるための手法として捉えることもできる。しかし同時に、レプトンはなぜ庭の所有者が自分の庭の眺めを排他的に楽しみたいと思うのかについて考察し、そこから人間に共通する空間の自己所有への欲望や、そこが自分の帰属すべき空間であるという認識を持つことがその空間を愛することにつながるという見識を導き出しているのである。所有することを自己に帰属させることへと敷衍すること、これはロマン派の詩人たちが自然の風景を自己の想念との交流において描くところと通じる。彼らの詩には、実際の土地の所有ではなく想像力が自然の眺めを「自分のもの」として把握する鍵となっている。目の前に広がる景色を「自分自身の故郷」、もしくは自分にとって意味深い風景、として表現するために、詩人たちは記憶や知覚を統合して風景を言葉にした。レプトンの造園デザインとロマン派詩の自然描写とは、前者が実際の庭空間を対象としているのに対し

後者が文字による表現である点において根本的な差異が存在することは確かである。とはいえ、レプトンの水彩画が描き出す庭空間の心地よさも、ロマン派詩の描く自然空間も、どちらも読者の想像力に訴えるものであるということは確かであろう。

4. おわりに

これまでハンフリー・レプトンの「専有化／適切化」の概念について見てきたが、レプトンの議論が土地の所有ではなく土地への愛着へと移る時、風景の美的整序を通したコミュニティへの視点が生まれていることに注意したい。所有地であるとならない関わらず、美しく整えられた場所に愛着を持つ行為が重要であるとすれば、それはイギリスが育てた造園の技術と庭への趣味を、国民の趣味として共有する方向を志向している。ダニエルズ(Stephen Daniels)が語るように、レプトンにとって庭の風景を美しく作ることは「愛国的な探求」(“patriotic pursuit” *Humphry Repton*, 1)であった。レプトンの作庭が単に国粹的なイデオロギーとはなりにくいとするれば、彼が依頼主の指示や社会的ステータス、そして土地の特徴などに応じた庭造りを心掛けたことと、緑の美しい風景への愛着という個々人の心の働きを重視しているためだろう。彼の提示した風景への視点は、同じ風景に対して共感を持つ人々の間に共有されるべきものである。レプトンが、大土地所有者の階層が文化的な優越を持つことを絶対的な前提として考えているのではないことは、当時すでに中産階級の人々が小さな庭を楽しむようになっており、レプトンもそのような変化を十分理解していたことを考えても明らかである。彼は *Fragments* の最後で、自分の居宅の Hartestreet では、一般の人々が行きかう光景が遠くに見えるように柵を取り払ったこと、そして家畜の群れを見るよりも人間の暮らしを眺める楽しみについて述べている (235-37)。

最後にロマン派の詩人ウィリアム・ワーズワス(William Wordsworth, 1770-1850)の詩を紹介したい。彼は代表作『序曲』(*Prelude*)の中で、故郷の山並みに続く道に見える光景について、次のように描いた。

Who doth not love to follow with his eye
The windings of a public way? the sight
Hath wrought on my imagination since

the morn

Of childhood, when a disappearing line,
One daily present to my eyes, that crossed
The naked summit of a far-off hill
Beyond the limits that my feet had trod,
Was like an invitation into space
Boundless, or guide into eternity.
(1850, Book Thirteenth, ll. 142-150)

村の道が曲がりくねって伸びていくのを
目で追うことを好まないものがあるのか。
この光景は物心ついた頃から
私の想像力に刻みつけられていたものだ。
その頃、遠くの草の生えない頂きを渡って、
見えなくなっていく道筋が日々目の前にあって
自分の足で行ったことのある境界の向こうまで
伸びていたのだが
それは無限の空間への招待、もしくは
永遠への道案内のようだった。

読者の目の前には、山並みの風景の手前から向こう
の方に伸びる村の道 (“a public way”) が描き出さ
れている。その道は山の上へと伸びて行き、そのう
ち視界から消えてしまうのであるが、それを語り手
は幼いころから心の中の風景として持っていたの
である。山の向こうへ思いを馳せるとき、無限や永
遠を思う心とともに読者に示されるのは、その光景
が自分の存在と深くつながったものとして心に焼
き付けられている様だろう。

もちろん、ここで描かれているのは庭ではなく、
山の多い地方の一筋の道とその背景の山々である。
しかしワーズワスがこの風景を通して伝えようと
していることのひとつが、レプトンの言う「私たち自
身の故郷と呼ぶことで愛しく思われるもの」
 (“...it may be endeared to us by calling it *our own home*.”) に限りなく近いだろうということも確か
である。ロマン派詩人の作品とレプトンの作庭にあ
る思想との関連性を掘り下げることは本稿の目的
を超えるが、少なくとも一定の共通点があると考え
られる。より広い19世紀の消費文化や視覚文化と
の関連から、庭園デザインとロマン主義文学との相
互関係が明らかにできるだろうと思われるが、これ
は筆者の今後の課題としたい。

¹ イギリス文学と庭園の関係についての研究は、川崎『庭のイ
ングランド』および安西『イギリス風形式庭園の美学』がある。
どちらも、18世紀風景庭園の成立をその論考の軸としていると
ころにおいて共通する。

² 一つの例として、リーズの羊毛王だった Benjamin Gott
(1762-1840) のレプトンによる庭園デザインがある。Daniels,
“Landscaping for a Manufacturer”に詳しい。

³ 18世紀後半から、Joseph Banks (1743-1820) によるキュー
植物園の整備と植物研究に代表されるように、諸外国の珍しい
植物への関心は高まっていた。リンネの植物分類はイギリスに
も定着したが、それはShteirが示すように女性の教養の一つと
して植物が学ばれたことにもよる。1787年にWilliam Curtisに
よって園芸・植物雑誌である *The Botanical Magazine* が発刊
された。その後の庭造りの大衆化を牽引したのは、ランドスケ
ープ・アーキテクトであり、植物学者でもあった John Claudius
Loudon (1783-1843) に代表される園芸ジャーナリズムの展開
である。

⁴ これらの提案書は Red Book と呼ばれた。赤い革表紙で表装
されていたからである。Red Book については、Daniels,
Humphry Repton および Rogger に詳しい。レプトンは現在の
庭の風景と、改良したあとの風景とを同時に絵で提示し、改良
の意図が良く分かるように工夫している。

⁵ Daniels, *Humphry Repton*, 1-25 に詳しい。

⁶ 最近では Henderson が19世紀初頭の消費文化との関連で、
レプトンをロマン派作家とともに論じている。なお、1907年に
John Nolen によってアメリカで出版されたレプトンの著作の
序文には、レプトンを積極的にロマン派の精神と結び付ける視
点が見られる。

⁷ レプトンは、*A letter to Uvedale Price* で、居宅は囲われて
いることで自分だけの安全な場所であるという心理的な安心感
がもたらされること、そしてそこでは「その屋敷の主の特別な
利用や喜びのために適切化されたのだという雰囲気」 (“the air
of being appropriated to the peculiar use and pleasure of the
proprietor,” 12-13) を持っていなければならないと語っている。

⁸ サミュエル・テイラー・コールリッジ (Samuel Taylor Col
leridge, 1772-1834) は、詩人が想像力によって知覚や想起によ
って得られたものを統合し詩的表現として作り上げることに
ついて、「我々の内的な本性から人間的関心を転写し (“to transfer
from our inward nature a human interest, *Biographia Lit
eraria*, 2:6) 」、「習慣から来る無関心から注意力を呼び起こ
し、我々の前にある世界の素晴らしさと驚異の前に心を導くこ
とで、ありきたりのものに斬新な魅力を与え、超自然に似た感
情を呼び覚ます」 (“to give the charm of novelty to things of
every day, and to excite a feeling analogous to the super
natural, by awakening the mind's attention from the leth
argy of custom, and directing it to the loveliness and the
wonders of the world before us.” *Biographia Literaria*, 2: 7)、

と述べている。

⁹ ウォルポールのテキストは、*Anecdotes of Painting in England*, 1782を使用した。

¹⁰ Cecilは、風景庭園の項をウォルポールの庭園論の引用から始め、次のように解説している。“This passion for the imitation of Nature was part of the general reaction which was taking place, not only in gardening, but in the world of letters and of fashion. The extremely artificial French taste had for long taken the lead in civilized Europe, and now there was an attempt to shake off the shackles of its exaggerated formalism”(244).

¹¹ ウォルポールの庭園論がホイッグ的な価値観に基づいたものであるという指摘は、すでにQuintanceにある。

¹² *Anecdote*, 1782 2nd ed., 255. “. . . a Roman consul, a polished emperor’s friend, and a man of elegant literature and taste, delighted in what the mob now scarce admire in a college-garden. All the ingredients of Pliny’s corresponded exactly with those laid out by London and Wise on Dutch principles.”

¹³ 安西、117-133参照。但し安西は、スペクテイター477号の記事も、414号と同じ文脈で論じている。

¹⁴ 初出では匿名の書評であった。対象となった本は、*Letters of Horace Walpole, Earl of Orford, to Sir Horace Mann, British Envoy at the Court of Tuscany*. Now first published from the Originals in the Possession of the Earl of Waldgrave. Edited by Lord Dover. 2 vols. 8vo. London: 1833.である。

¹⁵ ウォルポールの再評価は、1970年代になってWilmarth S. Lewisによって始められた。当時、マコーリーのウォルポール評が依然としてウォルポールの評価を下げていることを、Lewisは語っている(69)。

¹⁶ Art. VII. *Quarterly Review*, vol.16, 416-430. 書評のタイトルは次の通りである。*Fragment on the Theory and Practice of Landscape Gardening, including some remarks on Grecian and Gothic Architecture, collected from various MSS. In the possession of the different Noblemen and Gentlemen for whose use they were originally designed. The whole tending to establish fixed principles in the respective Arts*. By H. Repton, Esq. assisted by his Son, J. Adey Repton, F.A. S. Imperial 4to. Pp. 238. 1816.この書評の著者は不明である。

¹⁷ 17世紀の末には、庭園文化の衰退がはなはだしくなったとして、評者は次のように書いている。“The arts [of gardening] were now at their lowest ebb; and with Batty and Langley for our Gothic architects, and London and Wise for our landscape gardeners, we appear to have reached the ne plus ultra of absurdity”(Quarterly Review, 419).

¹⁸ “appropriation”の訳は、「専有化」もしくは「適切化」であるが、レプトンのこの用語の意は、文脈に応じたふくらみを

持つものである。論文では「専有化／適切化」と表記し、訳文中には文脈に沿った訳語を当てる。

¹⁹ George Byng, 4th Viscount Torrington(1740-1812)とWilliam Cavendish-Bentinck, 3rd Duke of Portlandの二人である。

²⁰ Danielsによれば、レプトンの庭園画の多くは、*Polite Repository* という日記帳のデザインとして流通した(Humphry Repton, 7-8)。

<参考文献>

- Addison, Joseph and Richard Steele. *The Spectator*. Ed. Donald F. Bond. 5vols. Oxford: Clarendon Press, 1965.
- Cecil, Evelyn. *A History of Gardening in England*. 1895; New York: E. P Dutton and Company, 1910.
- Coleridge, Samuel Taylor. *Biographia Literaria*. Ed. James Engell and W. Jackson Bate. *Collected Works*, vol. 7. 2 vols. Princeton: Princeton University Press, 1983.
- Conan, Michel (ed.). *Perspectives on Garden Histories*. Washington, D. C.: Dumbarton Oaks, 1999.
- Daniels, Stephen. *Humphry Repton: Landscape Gardening and the Geography of Georgian England*. New Haven: Yale UP, 1999.
- . "Landscaping for a Manufacturer: Humphry Repton's Commision for Benjamin Gott at Armley in 1809-10." *Journal of Historical Geography*, 7, 4(1981): 379-396.
- Edinburgh Review*. Edinburgh: Longman, 58(1834).
- Henderson, Andrea K. *Romanticism and the Painful Pleasures of Modern Life*. Cambridge: Cambridge UP, 2008.
- Hunt, John Dixon. "Approaches (New and Old) to Garden History." *Perspectives on Garden Histories*, 77-90.
- . *Gardens and the Picturesque*. London: MIT Press, 1997.
- Hyams, Edward. *Capability Brown and Humphry Repton*. London: J. M. Dent & Sons, 1971.
- Kliger, Samuel. "Whig Aesthetics: A Phase of Eighteenth Century Taste." *ELH*, 16 (1949): 135-150.
- Lewis, Wilmarth S. *Rescuing Horace Walpole*. New Haven: Yale UP, 1978.
- Malins, Edward. *English Landscaping and Literature 1660-1840*. London: Oxford UP, 1966.
- Quaintance, Richard E. "Walpole's Whig Interpretation of Landscaping History." *Studies in Eighteenth Century Culture*, 9(1979): 285-300.
- Quarterly Review*. vol. 16. London, 1817.
- Repton, Humphry. *The Art of Landscape Gardening: Including His Sketches and Hints on Landscape Gardening and Theory and Practice of Landscape Gardening*. Ed. and Introd. John Nolen. London, 1907.
- . *Fragments on the Theory and Practice of Landscape Gardening*. 1816; New York: Garland Publishing, 1982.
- . *A Letter to Uvedale Price, Esq.* London, 1794.
- Rogger, André. *Landscape of Taste: the Art of Humphry Repton's Red Books*. London: Routledge, 2007.
- Shteir, Ann B. *Cultivating Women, Cultivating Science: Flora's Daughters and Botany in England 1760-1860*. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1996.
- Walpole, Horace. *Anecdotes of Painting in England*. 2nd edition. London, 1782.
- . *Anecdotes of Painting in England*. Ed. with notes by James Dallaway. Vol. 4. London, 1827.
- . *Anecdotes of Painting in England. with additions by the Rev. James Dallaway*. A New Edition, Revised, by Ralph N. Wornum. Vol. 3, London, 1849.
- . "The History of the Modern Taste in Gardening." in Ed. Shimada et. al., *A Collection of Books on the English landscape Garden*. Vol. 3. Tokyo: Eureka Press, 2006.
- Wordsworth, William. *The Prelude 1799, 1805, 1850*. Ed. Jonathan Wordsworth et. al. New York: W. W. Norton, 1979.
- Yelling, J. A. *Common Field and Enclosure in England 1450-1850*. London: Macmillan, 1977.
- 安西信一 『イギリス風景式庭園の美学』 東京 東京大学出版会 2000年
- 川崎寿彦 『庭のイングランド』 名古屋 名古屋大学出版会 1983年

(平成 25 年 9 月 30 日受付)